

わたぼうし新聞 第5号

発行者 わたぼうし連絡会
発行日 昭和60年(1985年)11月15日

5号の特集 私の体験

人は 空に向かって寝る
寂しくて 空に向かい
疲れきって 空に向かい
勝利して 空に向かう
病気の時も
一日を終えて床につく時も
あなたがひとを無限の空に向けるのは
永遠を見つめよと
いっているのでしょうか
ひとは
空に向かって寝る

青年の船に参加する 会社員

「海を越えふれあう心 IYY'85（青年の船）は世界をつなぐ」をスローガンに日本人団員281名と訪問国を中心に十カ国より外国招へい団員66名を乗せた「にっぽん丸」は1月26日東京港を出港し、52日間の航海が始まったのです。訪問国は国校正常化20周年の韓国を初めインド、パキスタン、スリランカの4カ国です。

韓国は釜山と古都慶州を訪問しましたが、ソウルオリンピックを成功させるためのホテル、地下鉄の建設があちらこちらで見られ、国交躍進への意欲が見られました。又、多くの若者は日本に興味を示しながらも、過去の忌まわしい出来事を忘れられないと言っていました。インドは、ポンペイを2月14日から6日間訪問しました。この国は、貧富の差が激しく、人工衛星、原子力発電所を持ち、街には近代的高層ビル群がある。一方では、家もなく、貧しい人々があまりにも多いというアンバランスに驚くばかりでした。この国の紙幣には、14種の公用語が印刷してあり、人種はそれ以上の種類が存在しています。宗教はヒンズ教の他にキリスト教、仏教、私の民泊した家族は、イスラム教徒といった具合で日本では想像しがたいものがあります。

次にパキスタンのカラチですが、ここは一言でいうと、不毛地帯で市街地を出ると行けども行けども砂漠、カバンナで砂ぼこりに悩まされました。この国はイスラム教を政治に取り入れています、西欧文化指向のようでした。最後に、緑が美しい島国スリランカのコロomboに2月28日に入港。今までの最大級の歓迎を受け、船の代表が大統領を訪問することができました。ここの国民は親日的な人が多く、それは日本の援助への感謝とこれからの期待が含まれているようです。ここには、海外協力隊が約50名が現地の不自由な生活に耐えながら活躍をしていました。以上4カ国を訪問しましたが、各国でスポーツ交歓、記念植樹、船上交歓、船内公開、福祉施設訪問等の活動を通じて、多くの青年、一般市民との交流を深めました。

52日間の日程のうち30日が船内生活でしたが、休日は3日のみで、あとは研修日程がびっしりと組まれており、さしずめ洋上研修所と言ったところでした。この他にIYY記念パネルディスカッションや運動会が実施されましたが、外国青年は狭い甲板上に大勢の人間が整然と行動することに驚いていました。日本への帰路の途中、「青年の船祭り」が開催されましたが、奈良県の「タンポポの家」職員酒井靖さんがわたぼうしミニコンサートをやり喝采を浴びていました。

長い航海で、多くの友人と数々の貴重な体験をさせてもらいました。多くの仲間に感謝すると共に、多くの青年が「青年の船」の参加者に出ることを願ってやみません。

夏だ・海だ・「カメの子」キャンプ！ 在宅障害者

夏の海にロマンと潮風を求めて、またまた「カメの子サマーキャンプ」が8月10日、11日に柴垣で行われました。

私たち「かめの子」のサマーキャンプは、障害の重い人でも、気楽に参加していただけるように自己負担を少なくし、残りの多くを金沢市民の温かいカンパに頼っています。

このような訳で、定員がオーバーし、参加人数が増えると資金が不足します。そのため私達は毎週毎週、街頭にて資金援助、カンパにご協力を訴えてきました。市民の皆さんの温かい力で、一人も多くの障害を持つ人達がサマーキャンプに参加して、健常者の方たちとふれあい、自立とは？労働とは？施設とは？…とお互いに話し合い、金沢の街で車イスや障害の重い人が皆様と同じように生活できるように私達「かめの子」のサマーキャンプの資金援助、街頭カンパにご協力をお願いしました。

そして、私達「かめの子の集い」の第5回サマーキャンプには60人を超え、1年目は120人も参加して行われました。

「かめの子集い」も今年で6年目、その間いろいろな行事や催しを行ってきました。そよ風コンサート、エドロング氏の講演会、車イスラリー、その他、これらの資金は街頭カンパでたよってきました。

わたぼうし文芸コーナー

「差別」 施設入所者

私達 障害者が哀しいのは
手が動かないことではない
歩けないことではない
差別 差別されることである
人は笑ったり 同情したり
養護学校や人里離れた施設へ
人間として生まれながら
人間として認められない
手が動かなくっても 歩けなくっても
人間です みんな同じ人間です
哀しいときには 泣き
うれしいときには 喜び
くやしいときには 怒り
だれかとおしゃべりしたり けんかしたり
家族や地域の人々と
色々な関係を持ちながら……
社会って… それが当たり前だ

「にじ」 地域住民・障害者

にじのかけ橋 にじのかけ橋
だれがかけたのでしょうか 雲のむこうに
にじのかけ橋 にじのかけ橋
この橋 わたると何処へ行けるのでしょうか
にじのかけ橋 にじのかけ橋
思いでの世界へとかけていく
にじのかけ橋 にじのかけ橋
愛の世界へスキップしよう
にじのかけ橋 にじのかけ橋

「同 棲」 地域住民・障害者

智恵子よ 貴方は 何という女性だ
世の中の古い 悪い風潮に惑わされること 透明なレンガの階段を
いとほしき光太郎と共に
練り 焼き 積み
登って行かれたのだろう
だれも行くことのできない
高い 高いところへ
肉体も 精神も
そして いのちさえも
ひとつにつないで

今、生きていて！ ——みんな両親のおかげです——

障害者施設・入所者

僕は、18才まで京都にいました。目が少し悪いのと、頭が悪いのを除けば健康そのものでした。

ところが静岡の大学校（建設省建設大学校）入学した年に交通事故にあったのです。昭和52年の10月でした。（母と一緒に石川県にやってきたのは58年6月です。父はありがたい事に京都で働いていてくれます。たまには石川県へ帰ってきます。）

その学校は4年制でしたが、1年の時に台風災害の後始末に沖永良部島に派遣実践に行っていて、たまたま日曜日にレンタバイクの後に乗っていて事故にあったのです。自衛隊で沖縄の病院に運ばれたのですが、そこでの両親の苦勞って言ったら、口では言い表すことができない程だったそうです。

しかし、レンタバイクの前に乗っていた人は、足首を骨折しただけで、おまけに無免許でした。でも（僕は免許を持っていましたが）途中で運転を代わった事は、僕が悪いのですから、それを今さらどうこうという気はありませんが、一度ぐらい会いに来てくれても、バチが当たらないと思うのですが……それが腹立たしいですネ。僕のワガママでしょうか？SFにしておきますが、一生涯恨みそうです。

僕はまだまだですが、苦勞をかけた両親の為にも（なにしろ寝ずに100日間も沖縄の病院で看護してくれて、6ヶ月間も意識不明だったのだから）。訓練にがんばって少しでも、自分の事をできるようにしていきたいと思っています。とにかく、死んでいたかもしれない僕がここまでなれたのは両親のおかげです。ありがとうございました。

意見募集！ 人の命って何だ？

最近イジメによる中高生の自殺、先日は秋田県の水産高校で、インド方面に営業実習に行っていて「早く家に帰りたい」という単純な理由で、同級生を海につき落として死なせるという事件は、まだ、記憶に新しいと思います。

さて、ここで考えてみたいのは、「人の命」を現代の若者はどう思っているのか、ということ。能力主義の中で、よい学校やエリートを目指すための受験勉強の中で「人の温かみ、命の重さ」理解する心は、どこかへ行ってしまったのでしょうか？

先日、ラジオの「秋山ちえ子の談話室」で秋山さんは、その原因として「核家族化により、おじいちゃん、おばあちゃんの死に接することがないため、人が死ぬことによる家族の苦しみ、寂しさをわからないからだ」と言っていました。

これを機会に、もう一度「人の命」というものを考えてみたいと思います。読者のみなさんのご意見をお待ちしています。
～ 編集部より～

当新聞のあり方について

障害があるため、仕事のため、家事のため等々の都合で、交流の場や時間がとれない人達と交流の場を持つには？そんな中から一つの出会いとしての役割を持つ、この新聞が生まれました。しかし、おのずと活字には限界はあります。その一つは時間的なずれ、もう一つは生の語り合い、出会いにまさる交流はありません。

現代社会は、だれかどこで何を考えているのかをハッキリと、つかめていないままに動いている部分があります。私たちは、もっと色んな人達の色々な考え知り、違いを知り人を知り合うなかから、理解していかなければなりません。

この新聞が、そんな「キッカケ」となればとも考えています。そのためには、今後も読者一人一人が、この新聞をうまく利用していただければとも考えています。

今後について 編集局長

1. 主体となる内容が、福祉関係にとどまらず、広くかかわり、そしてかたよらないこと
2. 対話の場として、詩等の発表の場としていくこと。
3. 一つのテーマを特集すること。
4. 定期発行へ向けて努力すること。
5. 読者の拡大を図ること。

みんなの声

★ わたぼうし新聞の原稿を依頼されて、その都度、ことわってしまって済まないと思っています。新聞に関しては、無関心ではありません。福祉活動の一つとして、わたぼうし新聞がどれ程社会に役に立ち、私たち障害者が社会参加の大きな柱になると思っています。これからも、大いに生の声を載せて社会へ羽ばたいてほしいと思います。

★ 私は「ひまわり教室」（金沢市十一屋町の心身障害児通園施設）でボランティアをしています。わたぼうし新聞をお送りいただきありがとうございました。

私は今年始めて全国わたぼうし音楽祭に参加しました。やはり、スケールが違うなあーと圧倒されました。夜は、タンポポの家で小曾根さんや松兼さんとビールで乾杯しました。

さて、原稿とまではいきませんが、載せていただきたくペンを取りました、短歌でなく和歌です。一首ですがよろしくお願いします。

手そきなば 指より落つる たま緒の

黒髪に宿る 吾が背子の影

玉緒

交流シリーズ5

この交流シリーズでは、最近、障害児の養護学校への入学、施設への入所を拒否し、地域の学校、保育所へ通学させるという運動が各地で起こっていますが、このことが障害児（者）にとって本当に幸福なのか、また、どのようにすれば、障害者と健常者が交わって行けるかを考えて行くコーナーです。

地域の学校へ行って！ 地域住民・障害者

私が病気になったのが3才の時。私の障害手帳には、胸椎カリエス後遺症による体幹障害と記載されています。簡単にいいますと、歩行が少し困難でチビ、それと体が弱いというくらいでした。

28年前、そんな私が校区の小学校へ入学。今と違いますから、問題なく入れたのかどうか？ただ入学が一年遅れております。団体生活になれるためにとということだったように思います。保育所（地元）に一年留年？しました。

全校生徒1,200人の中に障害者は私一人、他の人たちと同じようにできなかったことは体育、火の気のない広い体育館に見学するわけですが、寒いし、退屈でもありました。あとは遠足、バス旅行（乗り物に酔う為参加しない人も他にもいました。）それくらいでし

ようか。学校でも、家でも、友だちとよく遊びましたし、学校で私のできないこと、たとえばイスを持って移動したり、という時などはだれかがしてくれました。

初めて自分が障害者と思い知らされたのは、高校入学の時でした。入学試験日一週間位前に「入れるかどうかわからない」と担任の先生から聞かされたのです。県立高校なのですが、学力不足という理由ではなく、障害者ということです。結局、入試の日に高校側が様子を見てということで入れましたけれど、そんなふうにして入った高校。やはり、障害者は私一人でした。担任の先生に風邪を引いて休んだのを（学生時代は、一ヶ月に一度は必ずと言っていいほど風邪を引いて欠席していました。）「ずる休み」と言われ、くやしくなって、風邪を引いて熱があるのに無理して学校へ行き、こしらせてしまったことがあります。

学校祭、交換ノート……。沢山の思いで。そして友だち……。

友だちと学生時代の話をしていた時のことですが、私を障害者として、意識したことはなかったと言ったこと。そして、私にとって、保育所から高校まで家から何分という所にあったことが幸いでした。

町の中、幼なじみに声をかけられて振り向く私。地区の学校を出た私の体験したことを少しだけ書いてみました。

本の紹介 四季抄

星野 富弘著 立野書房 定価 ¥1,000

美しさに感動できる心さえあれば、私にも絵が描けるのでは思った。…… ……中略 ……よだれを垂らしながら、ありったけの力をぶつけて引く線のうしろに、らんの花が一つずつ増えていくのは、絵というよりも、胸の中を開き始めた希望だった。（本文より）

たいへんきれいな、花の絵と、短い詩の中に、眼をさまさせ、ハッとする一言一言が、ちりばめられています。私たちが毎日の生活の中に、忘れてしまっていた最も人間として、大切な者ものがこの本の中から、再びもどってくるようです。表紙の詩と絵もその一つですが、もう一編ここに掲載します。

ほんとうのことなら 多くの言葉はいらない

野の草が 風に ゆれるように

小さなしぐさにも 輝きがある。

著者 ほしの とみひろ

昭和21年4月24日生まれ。群馬県勢多郡東村の小、中学校を卒業。県立桐生高校、さらに群馬県大学教育学部保健体育科を卒業後、高崎市立倉賀野中学校に、体育教師として赴任。わずか2ヶ月後、クラブ活動の指導中誤って墜落、以後、手足の自由を失う。9年間の病院生活ののち、不治のまま退院。現在は東村の自宅にて療養中。雑誌や新聞に、詩、画を連載執筆している。

事務局だより

日ごとに寒さが加わり、白いものがそろそろ降り始めるこのごろとなりました。

地域や国際社会等を考えるつどい等が各地で盛んに行われています。しかし、いつも思うことは、現状や問題点を話し合うことでとどまり、我々一人一人として何をなすべきか、何ができるか？は、ほとんど話されません。知識を得るためや議論のための議論が全く無意味だとはいいませんが、評論家をたくさん育てても、社会とは何のかかわりもないと思いますが、いかがでしょうか？。

5号は、それぞれの体験を中心に掲載しましたので、特集「健常者から見た障害者観」は次号にまわします。